

インターバンクの声（2017年5月31日）

連休明け海外市場の円相場は、ニューヨーク市場朝方の4月米個人消費支出などの発表前までは111円を中心に上下10銭ほどの小幅なレンジ内での取引が続いた。ロンドン市場の午前中は、ギリシャ支援への懸念やイタリア総選挙の前倒し観測などでリスク回避姿勢が強まっていたらしいが、東京市場の後半から続いていた小幅な値動きを見ていた限り、いつものような円買い圧力は感じられなかった。

米個人消費支出は前月比0.4%増、物価指数(デフレーター)も前月比で0.2%増となったため、円相場も一旦は111円23銭までドル買い・円売りの反応となった。

ただ、その後、発表された5月の米消費者信頼感指数が市場予想を下回り、株価が急に下げ始めたところに原油価格の下落も加わったとあって、結局110円67銭までドルが売り戻されてしまった。

昨夜の米経済指標は強弱まちまちの内容だったが、市場の6月利上げ観測に変化はないらしい。ただ弱い米経済指標に対するドル売りの反応が大きくなりつつあるように感じられるだけに、週末の雇用統計結果が気になる。

提供：SBIリクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。